

廃止方針撤回の県立川崎図書館

臨海部に移転検討

土地借用期限が迫っている県立川崎図書館について、県は11日、京浜臨海部の殿町地区(川崎市川崎区)に移転する方向で検討を始めたことを明らかにした。ライフイノベーション国際戦略総合特区に絡めて、県が「産業情報センター」としての機能を持つ拠点施設をつくることも表明。その新施設に入居する形態を想定している。

県は緊急財政対策の一環として川崎図書館の廃止方針を昨年11月に提示。今年2月に撤回したが「企業支援につながる機能を高度化・特化して川崎市内に残す」としただけで、移転場所を示していなかった。

県議会予算委員会で土井隆典氏(自民)の質問に、黒岩祐治知事は「殿町地区に県主導で戦略的総合的な施設をぜひ造りたい」と表明。さらに「ライフイノベーション特区の目指す方向性と川崎図書館の潜在力は、かなり軌を一にする。統合することは効果的。その方向で教育委員会と調整する」と述べた。

これに先立つ答弁で、県立図書館を所管する藤井良一教育長も「川崎図書館は知的所有権センターとして企業を支援してきた。こうした機能は(ライフイノベーション関連企業にも)大いに役立つと考えている」と述べ、生命科学関連企業を支援する視点で移転先を検討する方針を示唆した。川崎市によると、国際特区には今後、東大などの研究室も入居する予定だ。川崎図書館について、関係者の間では研究活動を補完する「科学技術ライブラリー」などとして期待する声もある。

川崎図書館では企業や大学などでつくる「神奈川県資料室研究会」が半世紀にわたり活動する。副会長の末廣恒夫さんは「移転先の見通しが立ったことを歓迎したい。産業支援の方向にも賛成だが、個人が排除されないか心配。今後は議論をよりオープンにし、われわれユーザーの声を反映してほしい」と話した。

(報道部)

聞 殿町地区に中核施設

新 県構想 川崎図書館も統合

経 黒岩祐治知事は11日の県議会予算委員会で、京浜臨海部でライフサイエンス（生命科学）や環境分野の研究開発拠点形成が進む川崎市川崎区の殿町地区に県の中核施設を新たに設置し、平成29年度末までに移転が必要な同区の県立川崎図書館も統合して存続させる構想を明らかにした。

殿町地区は「京浜臨海部ライフイノベーション国際戦略総合特区」の拠点。県は特区を推進するため「県主導の戦略的、総合的施設」（知事）を設け、国際的な産業支援機能や教育機能を強化。先端技術や特許に関する「産業情報センタ

ー」（仮称）といった機能の配置を想定している。

一方、川崎図書館は神奈川県臨調による県有施設全廃の提言を受けた見直しが行われ、県立図書館（横浜市西区）などと集約する方向で検討が進められていた。しかし、企業の技術報告書や学会誌の収集による研究支援と、特許取得の手続き指導といった現行機能を改めて評価し、同センターに統合する方向で調整する。

黒岩知事は「川崎図書館の持つ最新の技術情報の集積、企業の調査研究を支援する産業支援機能は、特区の目指している方向性と軌を一にする」と答弁した。

「マグカルって何だろう、マグカップかもしれない」

黒岩祐治知事は11日の県議会予算委員会で、県から文化芸術を発信する施策「マグカル事業」の名称の意味を解説し、笑いを誘った。

神奈川・黒岩祐治知事

マグカルとはマグネット・カルチャー。カタカナ言葉が氾濫して分かりづらいとの指摘を受けての答弁で、「想像力を働かせてもらえる面白い言葉」と説明した。当初はブロードウェー構想と呼んでいた。

県施策がマグカップ!?

だが、分からない言葉の方がいいという専門家会議の意見で決まったという。

キャスター時代を引き合いに、「県民に分かりやすい言葉でしゃべるのが信条」と前置き。「あえて



難しい言葉を使うこともある」と、自身が掲げる「いのち輝くマグネット神奈川」を例示して、「『分からない』と言われたが、繰り返し言い続けたら、いろんな方が使うようになった」と熱弁を振るった。